

第三十二回 齋藤茂吉短歌文学賞

# 岡野弘彦『岡野弘彦全歌集』

青磁社

選考委員

委員長 永田和宏

委員 小池光

小島ゆかり

三枝昂之

【贈呈式】

令和四年五月十五日（日）

（五十音順）

岡野 弘彦 『岡野弘彦全歌集』

(自選)

たたかひを憶ふ

ただれたる眼をしばたたき歩みゐつ骸燃えたつ巢鴨・大塚

足裏に疼きのごとく蘇りくる軍靴を踏みてゆきし夜の記憶

枕木をかさねし上に友のむくろつみあげて火を放たむとする

びようびようと犬啼きめぐる夜の闇に友を焼く火を守りて立ちをり

弾丸われをそれて過ぎしとおもふとき虚しく蒼し空のくるめき

ふぶきくる桜のもとに思ふこと押しなべて暗したたかひの惨

ただひそかに自虐の襞を刻みこし世代の顔の一つか我も

次々に胸に顕ち来て語るなき面影の幾つ我等持ちをり

辛くして我が生き得しは彼等より狡猾なりし故にあらじか

キリストのがれし後に縊らるるユダヤの村のみどり児の声

● 選考委員による選評

## 悠揚迫らざる作歌姿勢

永田 和宏

岡野弘彦さんの受賞を心から喜びたい。

何と言っても『岡野弘彦全歌集』最大の驚きは、全体の約四割にあたる、三三〇〇首以上の未刊の作品が収録されたことである。未刊歌篇<sup>①</sup>では、長歌、組歌、旋頭歌などさまざまの表現形式への試みが繰りかえし成されているが、それら挑戦的な試みをも敢えて歌集として公表しなかった、そんな悠揚迫らない、ある種禁欲的な姿勢は、どこか心に留めておきたいものである。また未刊歌篇<sup>②</sup>では、若き日の戦争体験、師であった折口信夫への思いが、繰り返して詠われる。詠いたいもの、詠うべきものは類想であろうとなかろうと、歌壇的な評価を気にすることなく詠い切る。そんな姿勢もまた同時代に生きるものとして心したいものである。

## あわれふかく

小池 光

岡野弘彦氏はうたがいもなく戦後短歌の一方の極にあった歌人であるが、これまでの刊行歌集は八冊と決して多くはなかった。これは寡作というのではなく、完璧主義のようなものが氏にはあつて、軽々に歌集に纏めることをよしとしなかったからかと思われる。

このたびの『岡野弘彦全歌集』には、八冊の既刊歌集に加えて膨大な量の「未刊歌篇」が丹念に発掘、収録されていて、その数は短歌だけでも三千余首に及ぶ。歌集五冊六冊分にもあたる。「全歌集」というより「全作品」と呼びたい重厚な一冊である。

どのページを開いても、点々とあわれふかい詠嘆と出会う。日本の国のうつくしさとともに、その悲しさが、ここにはある。

## 未刊三〇〇〇首の力

小島 ゆかり

『岡野弘彦全歌集』は、厳そかな歌の魂と、晴れやかな形式の容貌を見せて、歌人と作品の圧倒的な存在感を示した大冊と 생각합니다。

既刊八歌集は言うまでもなく、新たに加えられた未刊三〇〇〇余首は圧巻でした。質量ともにこれほど価値ある作品群が、二十年三十年を未完のまま蔵しまわれていたことに、作者の志の深さ潔さを思わずにはいられません。そしてそれは、この歌人の凜としたたたずまいそのものだとも。

さまざまな形式へのチャレンジの一方で、抒情詩としての潤いと品格のある佳品の数々、古典和歌への往還、また師・釈迢空への面影が過ぎる古代的エロスとも言うべき志向。現代歌人が学ぶべき多くのことを、あらためて思います。  
心からの敬意と祝意を申し上げます。

## 学徒兵のはるかな歩み

三枝 昂之

茂吉賞は岡野氏の師・釈迢空が深まる自分の老いを前にして「雪しろのはるかに来たる川上を見つゝおもへり。齋藤茂吉」と詠った茂吉との深い絆に繋がる賞である。文化勲章など既にあまたの名誉に彩られてはいるが、必ず受けて下さるとの確信が私にはあった。

『岡野弘彦全歌集』には膨大な数の未刊歌篇ⅠとⅡがあり、その作品を含むことよって岡野さんの軌跡がより鮮明になった。それをひと言で言えば、昭和の大戦を学徒兵として担った一人の歌人は昭和・平成・令和をいかに歩んできたか、その苦悩する精神史がここには刻まれている。そのことが尊い。

たたかひに死すべき命ながらへて、

蒼海原あをうなばらを見ればな哭かるる (未刊歌篇Ⅲ)

## 受賞のことば

岡野 弘彦

この度は、昨年末に刊行致しました私の「全歌集」に対し本賞を頂くこととなり、まことに名誉なことと感じ入ります。

私にとって齋藤茂吉先生の短歌の世界は、少年の頃からの憧憬でありました。師・折口信夫の許で過ごすようになってからは、直接お目にかかることもあり、心に深く学ばせて頂いた歌の上の師でもあります。こうして書いている間にも、日頃の愛誦歌が胸に浮かんでまいります。

今は家郷を離れ、都会の高齢者施設に老いの身をゆだねて過ごしておりますが、心だけは歌を離れることなく、ゆたかに楽しく生きております。

皆様の御厚志、つつしんで拝受いたします。ありがとうございます。



### 第33回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

岡野 弘彦 (おかの ひろひこ)

歌人。1924年(大正13年)三重県生まれ 東京都在住 97歳。  
國學院大學名誉教授。日本芸術院会員。

#### 【主な著作等】

歌集：昭和42年『冬の家族』、昭和47年『滄浪歌』、  
昭和51年『石打てば石』、昭和54年『岡野弘彦歌集』、  
昭和55年『海のまほろば』、昭和63年『天の鶴群』、  
平成2年『異類界消息』、平成3年『飛天』、  
平成18年『バグダッド燃ゆ』、平成24年『美しく愛しき日本』、  
平成30年『岡野弘彦百首』、令和3年『岡野弘彦全歌集』

著書：昭和52年『折口信夫の晩年』、昭和59年『歌を恋うる歌』、  
平成20年『歌仙の愉しみ』 他多数

受賞歴：昭和43年第11回現代歌人協会賞、昭和48年第7回遼空賞、  
昭和54年第29回芸術選奨文部科学大臣賞、  
昭和63年第39回読売文学賞、紫綬褒章、  
平成10年芸術院賞、勲三等瑞宝章、  
平成13年第14回和辻哲郎文化賞、  
平成18年第29回現代短歌大賞、第22回詩歌文学館賞、  
平成25年第4回日本歌人クラブ大賞、文化功労者、  
令和3年文化勲章

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
- 第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
- 第四回 前登志夫 『鳥獣蟲魚』 小澤書店
- 第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
- 第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
- 第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
- 第九回 吉田 漱 『白き山』全注釈』 短歌新聞社
- 第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店
- 第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社
- 第十二回 森岡 貞香 『夏至』 砂子屋書房
- 第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる斎藤茂吉』 短歌新聞社
- 第十五回 清水房雄 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 第十六回 小池 光 『滴滴集』 短歌研究社
- 第十七回 三枝 昂之 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 第十八回 花山多佳子 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 第十九回 永田 和宏 『後の日々』 角川書店
- 第二十回 河野 裕子 『母系』 青磁社
- 第二十一回 伊藤 一彦 『月の夜声』 本阿弥書店
- 第二十二回 品田 悦一 『斎藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房
- 第二十三回 篠 弘 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店
- 第二十四回 秋葉 四郎 『茂吉幻の歌集』 『萬軍』―戦争と斎藤茂吉―』 岩波書店
- 第二十五回 栗木 京子 『水仙の章』 砂子屋書房
- 第二十六回 小島ゆかり 『泥と青葉』 青磁社
- 第二十七回 柏崎 驍二 『北窓集』 短歌研究社
- 第二十八回 橋本 喜典 『行きて帰る』 短歌研究社
- 第二十九回 大辻 隆弘 『景德鎮』 砂子屋書房
- 第三十回 春日真木子 『何の扉か』 角川文化振興財団
- 第三十一回 吉川 宏志 『石蓮花』 書肆侃侃房
- 第三十二回 大島 史洋 『どんぐり』 現代短歌社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県観光文化スポーツ部

文化スポーツ振興課内TEL・〇二三―六三〇―二三〇六